

日本語就職用自己PR文でタイ・日本の学生は何をどんな語でPRしているのか

香山恆毅

1. 研究目的・背景・問い

本研究の目的は、日本語就職用自己PR文で、タイ人学生および日本人学生が何をどんな語でPRしているのかを明らかにすることである。下に、研究の背景、問い、データの概要を述べる。

タイの大学に通っているタイ人学生は、日本の会社の日本本社の一員として採用され始めている。同採用への応募では、日本の大学に通っている日本人学生と同じ日本語の応募書類を求められことがある。例えば、履歴書、自己PR文、志望動機書などである。チュラーロンコーン大学では2013年7月、日本語主専攻の最終学年の学生に向けて、日本の会社の日本本社17社から人材募集があった。この募集に21人の学生が応募し、その際に日本語の自己PR文を書いた。

この自己PR文は、本研究の協力者である日本人の社会人2人（以降、協力者、と記す）も読み、中には協力者が違和感を持つ文章もあった。例(1)に、タイ人学生が書いた自己PR文の実例を部分的に示す。個人が特定できる内容は「○」に置き換える。下線部は協力者がコメントを書いた部分である。協力者2人の社会人経験は、日本国内の会社に3年以上勤めた後、バンコクの日系会社に約2年勤めているというものであった。

(1) 私は（中略）○○キャンプに参加しました。（中略）キャンプの日常生活では、前もってその次の日の予定を必ず計画し、物事を準備しなければなりません。私は毎晩寝る前に次の日の担当させていただいた科目の内容と視覚教材全部準備しておきました。ですから、授業中の勉強を順調に教えられました。（中略）その経験から、事前準備をしっかりと、物事の順序や時間きちんと扱えるようになりました。

下線部に対して協力者は、「ギリギリ?」「もう少し前もって?」「事前準備のエピソードがあまりPRになっていない気がする」というコメントを書いた。これらのコメントは、タイ人学生が肯定的にとらえて書いた内容が、協力者に否定的にとらえられたこと表していると考ええる。

一方、タイ人学生も応募の際に筆者に質問やコメントを書いた。それらを2例示す。1例目は、「自己PRではどのような書き方を避けるべきですか、書くべきではありませんか (การเขียนแบบไหนที่ควรหลีกเลี่ยง ไม่ควรเขียนลง 自己PR)」と書いた（（ ）内のタイ語原文を筆者が訳した）。2例目は、「問題だと思ったことは、一つの出来事について、PRのためにはどの点を取り上げるべきかということです。例えば、書いたことは、私は『時間的にプレッシャーがある状況にも耐えること』と『無理だと思えることでも最後まで頑張ること』ができると思っています。そこで迷ってしまったのは、PRはどのような方向で書けばいいのだろうということです (ปัญหาที่รู้สึกก็คือ ในเหตุการณ์เดียวกันนั้น เราควรจะต้องประเด็นไหนออกมาเพื่อ PR อย่างเช่นที่เขียนไปเป็นเรื่องที่รู้สึกว่าได้ 'อดทน

ต่อสภาวะกดดันด้านเวลา' และก็ 'พยายามจนถึงที่สุดแม้จะเป็นเรื่องที่ดีเป็นไปไม่ได้' เลยทำให้หลังจากจะเขียน PR ตัวเองไปในแนวไหนดีล่ะ)」というコメントであった。これらの質問やコメントから、タイ人学生が知りたいことは日本の会社に肯定的にとらえられる物事であると考ええる。

南（1979: 13-22）は、ことばの使い手がおこなう「あることを話題にすることが適当である、適当でないといった判断」は「具体的な言語表現」に現れ、この判断の背景の一つに「その社会にとっての慣習的な物の見方、考え方、行動の型」があると述べている。具体的な言語表現とは、文章であれば実際に書かれた内容や語であると考ええる。したがって、ある社会の文章でよく現れた内容や語を知ることが、その社会にとって話題にすることが適当な物事や、肯定的にとらえられる物事を知ることにつながる考える。

そこで本研究は、日本語の就職用自己 PR 文で、タイ人学生および日本人学生が何をどんな語で PR しているのかを明らかにする。問いは下の 2 つである。

〈問い 1〉就職用自己 PR 文で何を PR しているのか。この問いに対しては、同文章の PR の対象が、能力なのか、考え方なのか、行動なのかなどを調べる。つまり、自己 PR 文の内容を抽象化して、その傾向を調べる。

〈問い 2〉どんな語で PR しているのか。この問いに対しては、同文章で多用された語が、「経験」なのか、「自信」なのか、「相手」なのかなどを調べる。つまり、自己 PR 文で具体的に現れた語の傾向を調べる。

データは、実際の応募に用いられた、または成績評価の対象であった就職用自己 PR 文で、タイ人学生 58 人、および日本人学生 42 人が書いた合計 100 編の文章である。詳細は 3 章で述べる。

2. 先行研究

就職用自己 PR 文に関する研究は、日本語教育研究では見られない。このため、自己 PR を自分に対するほめととらえ、ほめの談話についての研究方法を参考にする。金（2005）は、韓・日大学生の親しい同性友人同士 60 組による実際の会話のほめを分析している。問いの一つは、韓国語母語話者・日本語母語話者が何をよくほめているのかである。分析方法は、「ほめの談話」中の「ほめ」の発話を 7 種類の「ほめの対象」に分類し、その出現割合を示すという方法である。7 種類は、所持物、外見、外見の変化、才能、遂行、性格、行動、である。結果では、高い頻度でほめる対象が韓国語母語話者と日本語母語話者とで異なると述べている。具体的には、韓国語母語話者がほめる対象は頻度が高い順に、外見の変化＞外見＞遂行、であったが、日本語母語話者は、遂行＞行動、であったと報告している。考察では、韓・日間で起こりうるミス・コミュニケーションの原因について、『外見』を頻繁にほめたりすると、かえって日本語母語話者を戸惑わせたり、不快にさせてしまうかもしれない（金 2005: 20）と述べている。本研究は金（2005）の研究手法にならい、自己 PR 文の各文を「自己 PR の対象」に分類する。詳細は 3 章で述べる。

3. 研究方法

3.1 データと一次資料の概要

本研究のデータは、タイの大学で日本語を主専攻にしているタイ語母語話者（以降、T、と記す）、および日本の大学生である日本語母語話者（以降、J）が書いた日本語の就職用自己PR文である。下の3種類の一次資料を電子化し、平仮名・漢字表記のばらつきを統一したものである。

（ア）2013年度前期のT4年生22人が書いた22編の日本語電子文章。実際に日本で開かれた就職面接会に応募するために書いた文章である。

（イ）2013年度後期のT3年生36人が書いた36編の日本語手書き文章。科目日本語作文の成績評価の対象として授業時間に書いた文章である。自己分析と下書きは前週の授業でしてある。

（ウ）J42人が書いた42編の日本語文章。次の書籍3種類に掲載されていたものである。1.『内定勝者 私たちはこう言った！ こう書いた！ 合格実例集&セオリー2014 エントリーシート編』（2012）、2. 同書2010年版（2008）、3. 同書2007年版（2005）（キャリアデザインプロジェクト編著、以降『内定勝者』と記す）。

以降、一次資料が（ア）および（イ）であるデータをTデータ、（ウ）であるデータをJデータと呼ぶ。（ア）および（イ）を本研究で利用することに対するTの承諾は文書で得た。Jデータの一次資料に書籍を選んだのは、Tデータと条件に近い文章を得るためである。Tデータの自己PR文は、研究のために実験的に書かれたものではなく、就職のために、または成績評価を意識して本気で書かれた文章である。これと近い文章を得るために、Jデータの自己PR文は、実際に就職に用いられた実例から集めた。『内定勝者』を選んだ理由は、同書に次の記述があることである。「掲載してあるのは基本的に内定及び内々定者（共に自己申告）たちが作成したものである」（キャリアデザインプロジェクト編著2012: 125）。表1にTデータおよびJデータの概要をまとめる。本研究の結果および考察は、表1に示す日本語就職用自己PR文合計100編、約39,000字（本稿書式で約27ページ分）のデータにもとづくものである。

表1 データ概要

データの種類	書き手	編数 (編)	電子データ化後の 総字数 (字)	1編あたりの 平均字数 (字)
Tデータ	タイ語母語話者日本語専攻大学生	58	23,124	399
Jデータ	日本語母語話者大学生	42	15,736	375

3.2 分析方法

3.2.1 自己PRの対象 — 性格・主観的能力・客観的能力・考え方・行動・複合・なし

〈問い1〉の「何をPRしているのか」に対しては、金（2005）にならい、データを文単位で7種類の「自己PRの対象」に分類し、各対象の出現割合を調べる。表2に、「自己PRの対象」の種類、定義、およびTデータの実例（例(2)から(8)まで）を示す。[]内の番号は書き手を表す。

表2 「自己PRの対象」の種類と定義

自己PRの対象	定義	Tデータの例
性格	書き手の感情の傾向	(2) タイ語、日本語、英語などを使って、人々とやり取りすることが特に興味を持っています。[T58]
主観的能力	書き手が自分で認める一定の素質や能力	(3) その経験から、私はタイ文化説明の経験があり、タイの文化も更に分かるようになりました。[T40]
客観的能力	他者から認められた書き手の能力、または普遍妥当性をもつ能力	(4) 本来〇〇係は、1人1年間しかまかされないのですが、私の仕事ぶりを見て校長先生は3年連続まかしてくださいました。[T30]
考え方	書き手が考えたこと	(5) 学生に怒るより、彼らにもう二度と遅れないように注意した方がいいと私は思うようになりました。[T49]
行動	書き手の実際のおこない	(6) 〇年〇月にホストファミリーさんがタイに来ていましたから、ホームステイを受け入れ、ホストファミリーさんをタイのいろいろな観光地へ連れて行きました。[T40]
複合	上記の「自己PRの対象」を2種類以上含む文	(7) また、待ち合わせの時間を守らなければなりませんから、一度も遅刻しないで、教えに行きました。[T14] (考え方+行動)
なし	読み手にとってPRしているものがないと判断した文	(8) 毎日、いろいろな大変な仕事があったので、忙しくて、とても疲れました。[T7]

分類作業は、筆者が日本の会社の採用担当者の立場でおこなう。分類結果の信頼性は、金 (2005) と同様に第二認定者との一致度で確かめる。本研究の第二認定者は日本人の社会人 1 人であり、データ分類時の社会人経験は、日本国内の会社に約 6 年勤めた後、バンコクの日系会社に約 5 年勤めているというものであった。本研究への協力に対する誓約は第二認定者から文書で得た。一致度は Cohen (1960: 39-41) の「カッパ係数 (κ)」で確かめる。カッパ係数は単純一致率から偶然一致率を引いた値である。0 から 1 の値をとり、1 に近いほど一致度が高い。カッパ係数と一致度の対応は Landis and Koch (1977: 164-165) が次の「基準(benchmarks)」を示している。例えば、カッパ係数が 0.81 から 1.00 の場合は「一致度(Strength of Agreement)」が「ほぼ完璧(Almost Perfect)」、0.61 から 0.80 は「実質的(Substantial)」、0.41 から 0.60 は「適度(Moderate)」という基準である。本研究では、筆者と第二認定者がデータの 10%にあたる同一文章 (Tデータ 6 編および Jデータ 4 編) の各文を表 2 の「自己 PR の対象」に分類し、カッパ係数は 0.62 となった。つまり、筆者と第二認定者の分類は実質的に一致していたといえる。

3.2.2 多用された語 — 2 割以上の人に用いられた名詞・動詞・イ・ナ形容詞

〈問い 2〉の「どんな語で PR しているのか」に対しては、データで現れた語について 2 項目を調べる。1. 多用された語、2. 「多用された語」と「自己 PR の対象」の関係、である。本研究で

の「多用された」という言葉は、「2割以上の人に用いられた」という意味で用いる。2割（5人に1人）の人数は、Tは11人、Jは8人とする。2割という設定は、調査対象における特徴的な語の析出で、山本（2011）が Jaccard 係数を 0.2 以上に設定していたことを参考にした。Jaccard 係数は 2 つの集合間の類似度を表す値である。0 から 1 の値をとり、1 に近いほど類似度が高い。調査対象の品詞は、名詞（固有名詞を除く）、動詞、イ・ナ形容詞とする。「多用された語」と「自己 PR の対象」の関係を調べる目的は、内容が抽象化された「自己 PR の対象」と、具体的に現れた語を結び付けることである。語の抽出は主にコンピューターでおこなう。用いるソフトウェアは、KH Coder（計量テキスト分析ソフト）、MeCab（形態素解析ソフト）、ipadic（日本語辞書）である。コンピューターの抽出結果を手作業で確認した上で、多用された語を集計する。

4. 結果

4.1 自己 PR の対象

図1に、データを文単位で7種類の「自己 PR の対象」に分類し、その出現割合を調べた結果を示す。7種類は、1. 性格、2. 主観的能力、3. 客観的能力、4. 考え方、5. 行動、6. 複合、7. なし、であり、この順に右回りに提示する。() 内の値は、各対象に分類された文の数である。

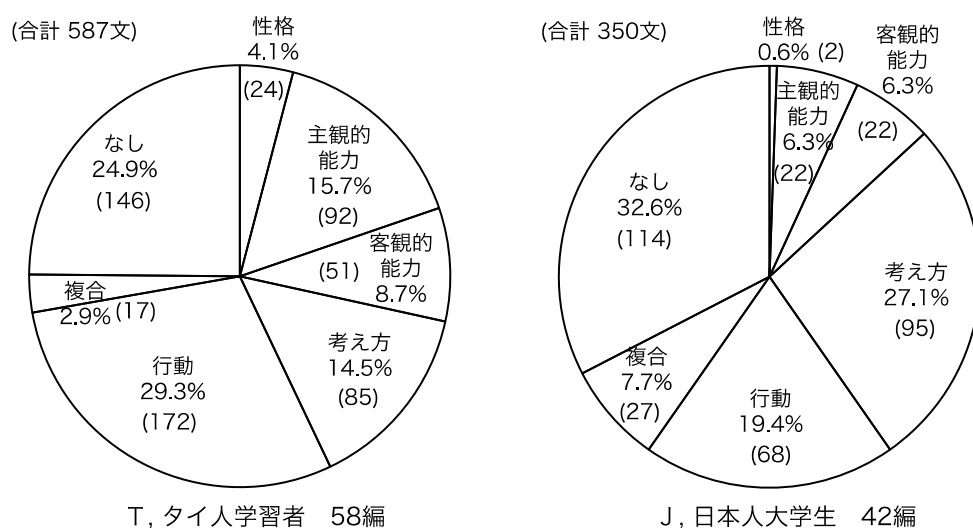


図1 就職用自己PR文で現れた「自己PRの対象」の出現割合

図1について2つ述べる。1つ目は、出現割合の高い「自己 PR の対象」が、T、J データ間で異なることである。T データでの「自己 PR の対象」は出現割合が高い順に、行動 29.3% > 主観的能力 15.7% > 考え方 14.5% > 客観的能力 8.7% > 性格 4.1%、であった（「複合」および「なし」は取り上げない）。J データでは、考え方 27.1% > 行動 19.4% > 主観的能力 6.3%・客観的能力 6.3% > 性格 0.6%、であった。例えば「考え方」は、J データでは最も現れる対象であったが、T データでは3 番目に現れる対象であった。このように、出現割合が高い「自己 PR の対象」はT、J

データ間で異なっていた。

図 1 についての 2 つ目は、出現割合の差が T、J データ間で大きい「自己 PR の対象」である。これは「主観的能力」と「考え方」であった。「主観的能力」を PR していると筆者が判断した文は、T データで J データの約 2.5 倍現れた。「考え方」を PR していると判断した文は、J データで T データの約 2 倍現れた（「性格」は、出現割合が T、J データ共に 5%未満であるため比較しない）。

4.2 多用された語

表 3 に、多用された語を T、J データ別に示す。本研究での多用された語とは、各データで 2 割以上の人に用いられた名詞、動詞、イ・ナ形容詞である。表 3 の語の提示順は、T データで多用された順である（表 3 の A、B）。J データでのみ多用された語については J データで多用された順である（同 C）。また、表 3 内のゴシック体の語は、T、J データ間で使用者割合の違いが 3 倍以上あった語である。以降これらゴシック体の語は、各データで「特徴的に現れた語」と呼ぶ。

表3 多用された語

品詞	多用された語		
	A：T データのみ 18語	B：T データおよび J データ 18語	C：J データのみ 21語
名詞	11語：日本(語・人), 高校, 自信, 時間, 参加, 責任(感), 留学, タイ語, 担当, 問題, 我慢	10語：経験, 自分, 仕事, 大学, 勉強, 力, アルバイト, 時代, 能力, 学生	15語：達成, 行動, 活動, 今, 相手, 成長, 結果, 企業, チーム, 目標, ゼミ, お客様・お客さん, 生活, 努力, 友人
動詞	5語：分かる, 行く, 任せる (任される)*, 話す・話し合う, 入る	7語：する, ある, できる, 思う, なる, 持つ, やる	5語：考える, 学ぶ, 得る, 感じる, 知る
イ・ナ形容詞	2語：いろいろ, さまざま	1語：いい	1語：多い

*：「任せてもらう」を含む。

表 3 について 2 つ述べる。1 つ目は、多用された語の約半数が、T、J データ間で共通していないことである。多用された名詞、動詞、イ・ナ形容詞を合わせた数は、T データが 36 語（表 3 の A+B）、J データが 39 語（同 B+C）であった。このうちそれぞれのデータでのみ多用された語は、T データでのみが 18 語（同 A）、J データでのみが 21 語（同 C）であった。このように、多用された語の約半数は T、J データ間で共通していなかった。なお、データの名詞、動詞、イ・ナ形容詞を合わせた異なり語数は、T データが 1,149 語、J データが 1,243 語であった。つまり、データ全体の異なり語に占める多用された語の割合は、T、J データ共に約 3%であった。

表 3 についての 2 つ目は、特徴的に現れた語である。T データで特徴的に現れた語は 15 語で、多用された順に「経験、日本（語・人）、高校、自信、時間、責任（感）、留学、タイ語、我慢、分かる、行く、任せる（任される）、入る、いろいろ、さまざま」であった。J データでは 13 語で、「達成、行動、相手、成長、結果、企業、目標、ゼミ、友人、考える、学ぶ、得る、感じる」

であった。なお、名詞「結果」は、接続詞のような「文頭において、先行する文とのつながりを示す役割」(益岡・田窪 1992: 57)をしていた次の3形式を除いて集計した。「。その結果(8例)」「。この結果(2例)」「。結果、(3例)」であり、計13例のうち12例はJデータ中であった。

4.3 「多用された語」と「自己PRの対象」の関係

ここでは4.2節で示した「多用された語」と、4.1節で示した「自己PRの対象」が関連しているかを調べた結果を示す(表4)。表4はクロス集計表で、横に「自己PRの対象」、縦にT、Jデータで共通して「多用された語」を並べた(表3のBの語、ただし「する」を除く)。表中の値は、多用された語が現れた文の数を表している。そして、それぞれの語で最も大きい値は、T、Jデータ別に四角で囲んだ(「自己PRの対象」が「複合」および「なし」には四角を付けない)。

表4 「多用された語」と「自己PRの対象」の関係

品詞	TおよびJデータで多用された語	自己PRの対象													
		Tデータ							Jデータ						
		性格	主観的能力	客観的能力	考え方	行動	複合	なし	性格	主観的能力	客観的能力	考え方	行動	複合	なし
名詞	経験	1	24	0	10	14	5	13	0	6	0	4	3	0	6
	自分	2	14	1	13	7	5	6	2	2	1	23	5	6	13
	仕事	2	6	3	15	16	3	11	0	2	1	8	7	2	5
	大学	1	3	6	2	23	0	7	0	0	3	6	16	0	12
	勉強	1	8	2	5	13	4	11	0	0	0	2	9	2	1
	力	1	11	1	3	2	1	1	0	5	0	6	4	1	0
	アルバイト	1	2	0	2	15	1	2	0	0	0	5	7	0	3
	時代	1	0	1	0	12	0	0	0	1	0	2	4	0	5
	能力	0	6	5	0	1	4	1	0	3	0	3	1	1	4
	学生	3	1	4	1	15	3	7	0	1	0	4	4	0	5
動詞	ある	3	21	3	9	43	4	21	1	4	0	8	6	1	13
	できる	3	27	9	14	8	7	12	1	10	9	16	7	5	17
	思う	4	11	2	19	1	5	14	1	2	0	12	3	0	8
	なる	9	27	10	16	14	9	20	0	2	5	5	6	4	10
	持つ	2	18	0	6	1	7	4	0	2	0	13	3	2	4
	やる	1	1	0	6	8	1	3	0	1	0	3	1	1	9
形容詞	いい	1	0	4	6	1	3	6	0	0	0	0	4	1	3

表4について2つ述べる。1つ目は、各「自己PRの対象」の四角囲みの数がT、Jデータ間で異なることである。各「自己PRの対象」の四角囲み数は、Tデータでは多い順に、行動8語>主観的能力7語>考え方2語、である。Jデータでは、考え方10語>行動7語>主観的能力2語、である。このように、T、Jデータで共通して多用された語に注目してみても、その語を含む文の「自己PRの対象」の傾向は、両データ間で異なっていた。つまり、同一の語でも、その語が用いられる文脈は同じではなかった。例えば、共通して多用された動詞「できる」を含む文は、Tデータでは、例(9)のように「主観的能力」をPRしている文が最も多かった(27例、表4より)。Jデータでは、例(10)のように「考え方」が最も多かった(16例、同左)。

- (9) その経験から、私は時間厳守など、日本会社の規則に慣れてきてきちんと守り自分を律することができます。[T2]
- (10) この経験から、人を巻き込んで積極的に行動することで、組織を変えることができるということを学びました。[J13]

表 4 についての 2 つ目は、表 4 の傾向が図 1 の傾向と一致していることである。図 1 はデータ全体の「自己 PR の対象」の出現割合であり、割合が高い順に、T データが、行動＞主観的能力＞考え方、J データが、考え方＞行動＞主観的能力、であった。上に示した表 4 の傾向も同じである。したがって、多用された語を含む文脈は、各文を「自己 PR の対象」に分類する際に、分類を判断する要因になっていた可能性がある。これについては 5 章で考察する。

5. まとめと考察

5.1 まとめ

本研究の目的は、日本語専攻タイ人学生（T）および日本人学生（J）が、日本語の就職用自己 PR 文で何をどんな語で PR しているのかを明らかにすることであった。データは、実際の応募に用いられた、または成績評価の対象であった文章で、T 58 人および J 42 人が書いた合計 100 編の文章であった。得られた傾向を下にまとめる。

〈傾向 1〉「自己 PR の対象」の出現傾向は、T、J データ間で異なっていた。T データでは多い順に、行動 29.3%＞主観的能力 15.7%＞考え方 14.5%、であった。J データでは、考え方 27.1%＞行動 19.4%＞主観的能力 6.3%・客観的能力 6.3%、であった。

〈傾向 2〉出現割合の差が大きい「自己 PR の対象」は、「主観的能力」と「考え方」であった。T データでは「主観的能力」が J データの約 2.5 倍現れた。J データでは「考え方」が T データの約 2 倍現れた。

〈傾向 3〉多用された語は、約半数が T、J データ間で共通していなかった。多用された名詞、動詞、イ・ナ形容詞を合わせた数は、T データが 36 語、J データが 39 語であった。このうちそれぞれのデータでのみ多用された語は、T データが 18 語、J データが 21 語であった。データ全体の異なり語に占める多用された語の割合は、T、J データ共に約 3%であった。

〈傾向 4〉T データで特徴的に現れた語は 15 語で、「経験、日本（語・人）、高校、自信、時間、責任（感）、留学、タイ語、我慢、分かる、行く、任せる（任される）、入る、いろいろ、さまざま」であった。J データでは 13 語で、「結果、達成、行動、相手、成長、企業、目標、ゼミ、友人、考える、学ぶ、得る、感じる」であった。

〈傾向 5〉多用された語を含む文の「自己 PR の対象」の出現傾向は、データ全体の同傾向と一致していた。

5.2 考察 — 「自己PRの対象」の判断要因

ここでは、筆者が「自己PRの対象」を判断した要因を考える。本研究はまず、自己PR文を文単位で7種類の「自己PRの対象」に分類した。次に「自己PRの対象」と「多用された語」の関連を調べた。そして多用された語を含む文脈は、各文を「自己PRの対象」に分類する際に、分類を判断する要因になっていた可能性があると考えた。また、本研究での多用された語の割合は、データ全体の異なり語数の約3%であった。このような少数の多用された語が、データ全体の内容に与えた影響を調べる。

まず、多用された語を含む文のみをデータから取り出す。そして、これらの文のみで「自己PRの対象」の出現傾向を見る。この出現傾向は、データ全体のものを図1で示した。下に、多用された語を含む文のみで図1と同様の図を描く（図2）。

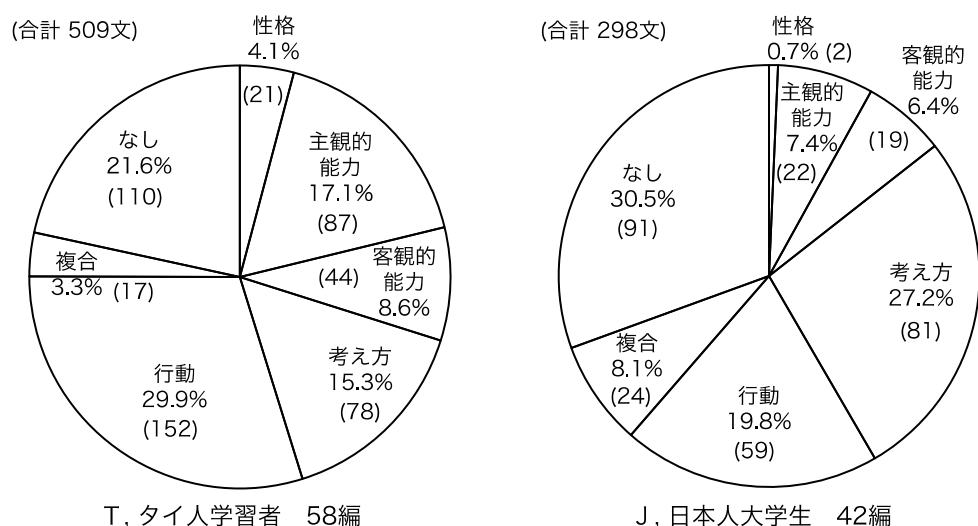


図2 就職用自己PR文で現れた「自己PRの対象」の出現割合 — 「多用された語」を含む文のみ

図2と図1を見比べながら2つ述べる。1つ目は、図2と図1がほぼ同じ形をしていることである。つまり、多用された語を含む文のみによる「自己PRの対象」の出現割合（図2）は、データ全体の同出現割合（図1）に近い。図2の各割合は、図1に対して違いが1割以内である。

2つ目は、多用された語が、データ全体の大半の文に含まれることである。多用された語を含む文の割合は、データ全体の文数に対して、Tデータが86.7% (=509文/587文)、Jデータが85.1% (=298文/350文)である。文数は図1、図2内で共に（ ）内に示した。

ここまでをまとめると、多用された語は数は少ないが（異なり語の約3%）、データ全体の大半の文で現れた（約85%）。そして、多用された語を含む文のみの傾向は（図2）、データ全体の傾向（図1）と似ていた。さらに、T、Jデータで共通して多用された語のみに注目しても、これらの語を含む文が示した傾向は図1と一致していた（表4）。したがって、多用された少数の語を含む文脈が、データ全体の「自己PRの対象」の傾向を決める要因であったと考える。

1 章に、日本語の就職用自己 PR 文で何を取り上げるべきかというタイ人学生の質問を示した。あることを話題にすることが適当かどうかの判断は具体的な言語表現に現れると南（1979）は述べていた。この言語表現について、T、J データで多用された語を調べ、多用された語を含む文脈が、データ全体の傾向を決める要因であったと考察した。上の質問に本研究の考察の範囲内で答えるなら、日本人学生が適当であると考えている就職用自己 PR 文は、「行動，相手，成長，チーム，目標，考える，学ぶ，感じる」などの語を用いて「考え方」を PR している文章といえるであろう。今後は、読み手である日本の会社に肯定的にとらえられる物事をさぐりたい。

参考文献

- 金庚芬（2005）「会話に見られる『ほめ』の対象に関する日韓対照研究」『日本語教育』124 号、日本語教育学会、pp13-22
- キャリアデザインプロジェクト（編著）（2005）『内定勝者 私たちはこう言った！ こう書いた！ 合格実例集&セオリー2007 エントリーシート、履歴書、面接、志望動機、自己 PR』PHP 研究所
- （2008）『内定勝者 私たちはこう言った！ こう書いた！ 合格実例集&セオリー2010 エントリーシート編』PHP 研究所
- （2012）『内定勝者 私たちはこう言った！ こう書いた！ 合格実例集&セオリー2014 エントリーシート編』PHP 研究所
- 益岡隆志・田窪行則（1992）『基礎日本語文法 — 改訂版 —』くろしお出版
- 南不二男（1979）「言語行動の研究の問題点」南不二男（編）『講座言語 第3巻 言語と行動』大修館書店、pp3-30
- 山本冴里（2011）「国会における日本語教育関係議論のアクターと論点 — 国会会議録の計量テキスト分析からの概観 —」『日本語教育』149 号、日本語教育学会、pp1-15
- Cohen, J. (1960) A Coefficient of Agreement for Nominal Scales. *Educational and Psychological Measurement*, 20 (1), pp37-46
- Landis, J. R., Koch, G. G. (1977) The Measurement of Observer Agreement for Categorical data. *Biometrics*, 33 (1), pp159-174

付記：本稿の内容は、2014 年 12 月に、チュラーロンコーン大学文学部東洋言語学科「外国語としての日本語コース」に提出した修士論文の一部をもとにした。また、本稿の冒頭で述べた応募者 21 人は、4 人が日本での 17 社合同面接会に呼ばれ、うち 2 人が採用されて日本で働いている。

Note: This research is supported by the Ratchadaphiseksomphot Endowment Fund of Chulalongkorn University (RES560530179-HS).